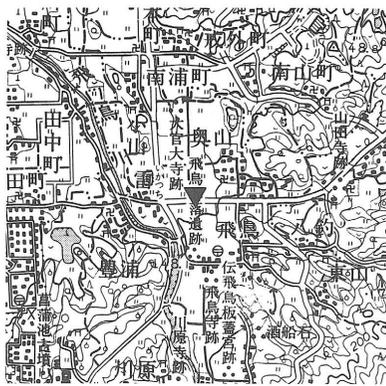


奈良・石神遺跡^{いしがみ}

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村飛鳥
- 2 調査期間 第一九次調査 二〇〇六年(平18) 一〇月～二〇〇七年五月
- 3 発掘機関 奈良文化財研究所都城発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 巽淳一郎
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(吉野山)

石神遺跡では、一九八一年以来の継続調査により、A期(七世紀前半～中頃)、B期(七世紀後半)、C期(七世紀末)の遺構群を検出している。遺跡が最も整うのはA3期で、斉明朝の公的饗宴施設として使用されたが、B・C期には官衙的な様相を呈する。第一九次調査区は、石神遺跡の主体となる建物

群の北外周部で、木簡が多数出土した第一五・一六・一八次調査区の北隣である。調査面積は八七〇㎡。検出した主な遺構は、阿倍山田道・溝・沼沢地・堰状施設・杭列・礫溜まりなどである。遺構は五時期あるため、従来のA～C期ではなく、I～V期に分けて記す。

I期（七世紀中葉以前）は調査区に谷が入り、西側には沼沢地SX四〇五〇が広がり、その内部に堰状施設SX四二六二が設置されている。東側の微高地には斜行溝SD四二六〇を掘削する。II期（七世紀中葉～後半）はSX四〇五〇・SD四二六〇を埋め、阿倍山田道SF二六〇七をつくる。SD四二六〇には七世紀中葉の飛鳥I新段階の土器が多数含まれ、阿倍山田道の建設はこの頃となる。道は盛土工法で構築され、基礎部分には敷葉工法が用いられていた。こうして路面を盛土した後、南側溝SD四二七〇を掘削する。その南側には、第一五次調査区から続く南北大溝SD四〇九〇が屈曲して西に流れる。これまで大溝の掘削時期は七世紀後半のB期としてきたが、道路の盛土が大溝北岸となる堤の役割を果たすため、七世紀中葉に遡る可能性がでてきた。III期（七世紀後半）はSD四二七〇・四〇九〇を埋め、東西溝（阿倍山田道南側溝）SD四二七五、南側溝SD一三四七Aを設けてT字状に接続させる。IV期（七世紀末）はSD四二七五・一三四七Aを埋め、東西溝SD四二八〇・四二八五（阿倍山田道南側溝）、南北溝SD一三四七Bを掘ってT字状に接続させる。北側の山田道第二・三次調査では、この時期の北側溝

とみられる東西溝が検出されており、路面幅約一八mと推定できる。V期（奈良時代～中世）には南北溝SD四二八九、礫敷SX四二五五・四二五九などがある。

木簡は、SX四〇五〇埋立土から一点、SD四二六〇から五点、SF二六〇七造成土から二点、SD四〇九〇から二点（うち削層四点）、SD四二七五から一点、SD四二七五埋め立てに伴う周辺整地土である暗灰褐色粘質土から一点、SD四二八〇から三点、SD四二八五とSD一三四七Bの合流地点から一点、SD四二八九から四点、現代暗渠から一点、V期以前の茶灰色土から一点、計三十四点（うち削層四点）が出土した。釈読可能な二二点を紹介する。

8 木簡の釈文・内容

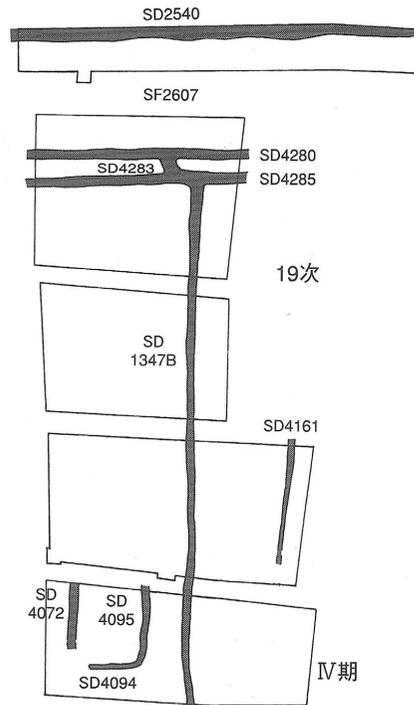
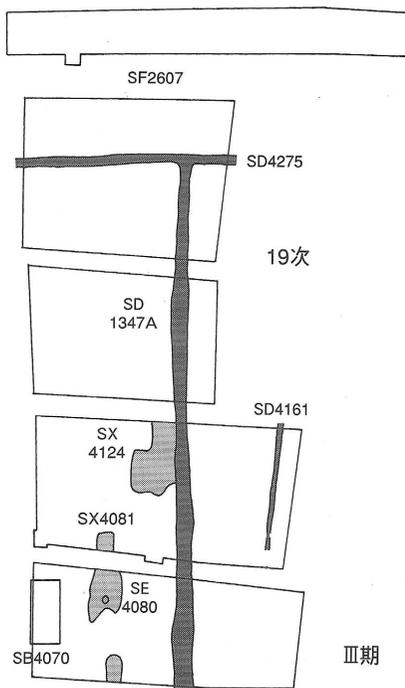
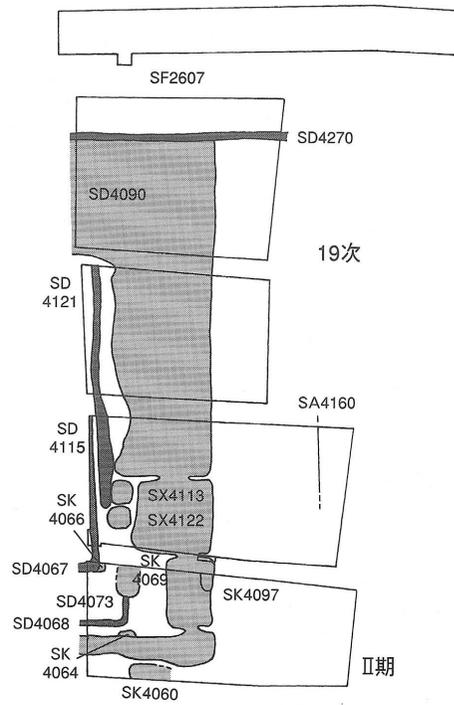
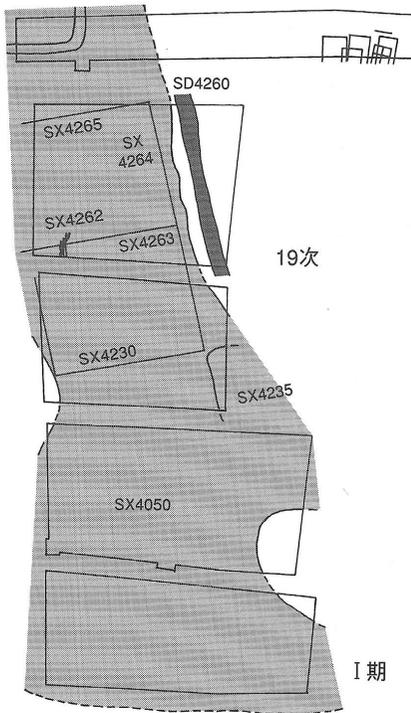
斜行溝SD四二六〇

(1) □□女丁大人丁□取□久□ 〔意カ〕〔御カ〕 (355)×21×6 081

(2) 〔>〕大家臣…□首大□ (57+31)×18×3 032

(3) ・〔<〕十五斤 〕

・〔∨〕□□□□□〕 〔思カ〕



石神遺跡北方遺構変遷図

東西溝SD四二八五と南北溝SD一三四七B合流点

(17) 「V田田塩二斗V」 118×23×7 031

南北溝SD四二八九

(18) ・「V 上長押釘卅隻 之中打合釘二 五丈」
長七寸

・「V」(削り残り) 248×36×3 032*

(19) □村廣人弟国 □ (124)×20×3 081

(20) ・ 正月四日志紀未成」

・ □ (148)×11×2 081

(21) □一□□
□三□□
□四枚」 (177)×22×2 061(楡屑)*

現代暗渠

(22) 「。小柱十九」 150×37×4 081

(1)～(6)は七世紀中葉頃の木簡。(1)は上下両端折れ。古拙を強くともめた字体。「女丁」との対比から、「大人丁」は正丁を指すとみら

れる。(2)は上下二片からなるが、中間を欠く。下片の下端は二次的削り。下片の四文字目はウ冠が確認でき、「家」の可能性がある。(3)は完形の物品整理用の付札。裏面は二次的な墨書。(4)は各辺を面取りした小型直方体に刻書する。(5)は墨書が薄く、検討を要する。(6)は大型材を用い、文字も巨大で、呪符のような趣もある。(7)以下は各種遺構から出土するが、木簡自体は七世紀後半である。(7)は完形の贅荷札。贅の荷札は通常、物品・数量以外は、貢進地名のみを記すが、本木簡では人名のみを記載する。調と贅の類似性を示す史料として重要。(8)は上下二片接続で、上下両端折れ。(9)は三片接続。上下両端折れ、左右両辺割れ。上部は「五十代」など代制とみられる地積を墨書し、下部は歴名を刻書する。歴名には「以蛭マ」「乙里」という珍しいウジ名がみえる。「石上大連」も八色の改姓以前の可能性があるだけに議論を呼ぼう。(10)は記録簡を二次的整形したもの。三片接続で、下端折れ、左辺割れ。「沙弥」との対応から、上は「僧」と書かれていたと推定される。読経や法会に参集する僧・沙弥の人数を書き上げたものであろう。(11)は下端折れ、左辺割れの習書木簡。「椋」は七世紀に一般的なクラの表記。(12)は荷札木簡の下端部を二次的に整形して尖らせる。本来は尾張国の荷札か。二文字目からは表面が削り取られている。(13)はほぼ完形の養米荷札。一文字目は「少」の可能性もある。二文字目は旁が「鳥」の字体。(14)は完形の鰻荷札。「辛巳年」は天武一〇年(六八

一)。物品・数量を記した後に地名を書くのは珍しい。(15)は荷札に由来するとみられるが、上端以外は欠損する。(16)は二片接続で、上端折れ。下部には穿孔がある。(17)は完形荷札。塩を貢進することから、「田田」は後の紀伊国名草郡多田郷に該当するか。サト名の次に「五十戸」「里」を省略している。(18)は完形だが、裏面の墨書は削り残り。「五丈」は上長押の長さで、割書にはそれを組み立てる際に使用する釘の種類と本数を記す。付札状を呈した進上状で、地方からの貢進荷札ではない。(19)は上端折れ、下端二次的切断。「弟国」は「廣人」の出身地とみられ、後の山城国乙訓郡に該当しよう。一文字目は下部が「木」の字体で、「集」と釈読できれば、「物集村」の可能性がある。(20)は上端折れで、材の下部に日付と人名を記す。(21)は二三枚を同じ合わせた檜扇の破片(上部欠損)で、最も外側の一枚に墨書する。(22)は上端部の左右二箇所径約5mmの小孔があり、その下に墨書する。番付に関わるか。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』(二〇〇八年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』二二(二〇〇八年)

(市 大樹)